

教員名	岡崎 眸 (OKAZAKI Hitomi)
所 属	文教育学部言語文化学科日本語教育講座
学 位	P h . D (1986 年 ミシガン大学)
職 名	教授
URL/E-mail	

◆研究キーワード

共生日本語教育 / 年少者日本語教育 / 日本語教員養成

◆主要業績

総数 (7) 件

・岡崎眸編著『多言語多文化社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究』(基盤研究 (B)(2) 平成 14 年度?平成 17 年度 課題番号 14380117) 2006 年 3 月 pp.1-312

・岡崎眸「年少者日本語教育の課題」『共生時代を生きる日本語教育?上野田鶴子言語博士古稀記念論集?』お茶の水女子大学日本言語文化学会編 凡人社 (pp.165-182) 2005 年 10 月

・「子どもの母語を生かした学習支援?子ども、教員、地域の支援者にとっての意義?」岡崎眸 『児童教育』 15 pp.20-24

◆研究内容

主に二つの研究課題で研究を行った。(1) 多言語・多文化共生社会を切り開く日本語教育と教員養成のあり方を探ることを研究課題として、01 年から継続してきた基盤 B (2) (研究代表者)の最終年度に当たる 05 年度には、それまでの研究成果を総括する研究に展開し、成果報告書を作成した。具体的には、第一に、日本語母語話者と非母語話者が参加し、互いが共生するための言語的手段の獲得を目標とする共生日本語教育の特徴を提示したこと、第二に、共生日本語教育実習を受講した実習生の学びを質的・量的に明らかにしたこと、第三に、内省モデルに基づく実習プログラムの特徴を提示したことが挙げられる。(2) 言語少数派年少者の教科学習支援のあり方を探る萌芽研究(研究代表者)の開始年度にあたり、横浜市鶴見中学の協力を得て、母語を活用し、母語の育成と統合した教科学習支援を二人の生徒を対象として行い、その特徴を観察した。結果、教育課程の中で母語を活用した授業の可能性が示唆され、次年度の取り組みに向けた基盤がつくられた。

◆教育内容

(1) 日本語教育コースで開講している「日本語教育実習」を科研費研究の一環とすることで、受講生だけでなく、後期課程国際日本学に所属する院生も含めて研究チームを作り、研究を進める態勢を作った。実習生間の話し合い、実習生の内省レポート、教壇実習における実習生の教授行動、参加者の談話などを収集し分析し、研究会で口頭発表を行い、論文にまとめる作業を行った。この態勢により、?自分たちの実践を対象とすることで、実践と研究の相互交流を体験できること、?グループによる研究とすることで、研究手法が先輩から後輩に伝授され、共有されること、?修士 1 年次にも小さい論文を 1 本仕上げられること、などの点で、日本語教育研究者を養成することを目標とする本コースにとって教育的意義があると考えた。この研究への参加を通して、修士論文、博士論文へと研究課題を育てていく院生もいる。(2) 鶴見中学における教科学習支援に院生を参加させることで、学校現場を知り、現場に直接影響力を与えることのできる研究のあり方について考える場を与えた。

◆Research Pursuits

The major research agendas were the following: (1) establishing methodologies for Japanese language education and teacher-development which aimed at facilitating to develop multilingual/multicultural society; (2) developing a system which was designed to support school subjects learning of linguistic minority children. The agenda(1) was conducted as the final step of a five year research project B(2) funded by JSPS, and the final research report was published.. The agenda(2) was processed as the first step of a three year pioneer research project, also funded by JSPS. The project was done going the full scale cooperation of Tsurumi junior high school in Yokohama city.

◆Educational Pursuits

The educational pursue should be characterized as the following: (1) education pro gram for Japanese language teacher practicum was put through by being carefully designed to be integrated to a research project funded by JSPS .; (2) establishing a system in which graduate students participate in the school subjects learning support system for linguistic minority children in Tsurumi junior high school designed for the graduate students participants to shape the field where the had the opportunity to identify what would be the appropriate research manner that could be responsive to and therefore influential to educational practice. Each of the attendants above had chances of the following experiences: 1. interactions between their teaching practice and research conducts; 2. research methodologies and fine techniques..

◆共同研究例

- ・共生日本語教育で扱われる教材開発

◆将来の研究計画・研究の展望

- ・「母語を用いた帰国・外国人児童生徒支援に関する調査研究」2004-2005（横浜市教育委員会）
- ・「母語を用いた学習支援モデル事業」2001-2003（横浜市国際交流協会）
- ・ 1）現在進めている萌芽研究の結果をもとにして、小中学校の教育課程の中で、国際教室担当の教員を中心にして教科・母語・日本語相互育成モデルに基づいた授業実践を実施するためのマニュアルを作成する。（2）共生日本語教育実習の受講生と教壇実習用教室の参加者を対象として、もともととから持っている前提だけでなくその前提の源まで遡って意識変容を促す実習コースのデザインを追求する。

◆受験生等へのメッセージ

グローバル化に伴う社会の多言語化・多文化化の動きの中で、特にその社会で言語少数派に属する人々の言語権（母語を使う、母語を保持・育成する権利とその社会の共通言語を学び使う権利）は軽視され蹂躪されるという問題が深刻化しています。そこで、国内の言語少数派の人々（例えば就労目的で来日する日系人や日本人との結婚により来日するアジアからの花嫁など）を対象として、この社会の共通言語である日本語教育を支援する第二言語としての日本語教育のあり方が問われることになります。現状では、日本語の習得だけが強調されることによって、日本への同化要請の道具として機能するという傾向が見られます。彼らの母語・母文化の尊重の実現と統合される形の日本語教育のあり方が追求されなければならないと考えます。日本語教育コースで開講している「共生日本語教育実習」を中心にして、言語話者としての人々の全人格・生活全般を見渡す日本語教育のあり方学生のみなさんと一緒に追求していきたいと考えています。